

特別支援学校の教育機能とその構造

The Educational Functions and Its Structures in Special Support School

佐久間 宏

はじめに

宇都宮大学および作新学院大学において、「知的障害児心理学」の講義を40年以上にわたり担当している。講義の資料は基本的には、東京都心身障害者福祉センター（知的障害科）における就労支援、宇都宮大学教育学部養護学校教員養成課程および附属養護学校の教育実践より得られたものである。

最初の職場である東京都心身障害者福祉センターでは、特別支援学級や特別支援学校を卒業し一般就労したけれども、何らかの事情で退職した知的障害者の職業リハビリテーションを主な業務としていた。具体的には、利用者をセンター訓練室に通所させ、将来の一般就労を目指した社会生活および作業能力向上を図る訓練と評価、職場開拓、事業所との面接や職場実習、そして職場定着指導を継続的に行っていた。ここでの実践は、「知的障害者の職業的自立に関する研究」¹⁾にまとめた。

同センターの研修の一環で、「こころみ学園」（園長川田昇、足利市）において、園生と一緒に厳しい労働を軸とした共同生活を体験した。「暑い我慢 寒い我慢」を指導原理とするここでの経験は、その後の「こころみ学園に関する研究」²⁾の契機となった。

縁あって、国立大学法人宇都宮大学の教員に任用され、その後の37年間は講師、助教授、そして教授として学生や院生の教育と知的障害児心理学の研究に従事した。

とくに、1981年からの3年間は、独立行政法人国立特別支援教育総合研究所（旧国立特殊教育総合研究所）の「障害児のパターン認識に関する総合的研究」³⁾に、34名の研究スタッフの一人として加わった。この研究過程で、「視覚パターン認識発達診断検査（略称、VPR T）」を開発するとともに、知的障害児を対象にVPR Tや知能検査（WISC-R）を実施し、「知的障害児の視覚パターン認識の諸特性」⁴⁾にその結果をまとめた。

また、2001年度からは、宇都宮大学教育学部附属養護学校の校長として、学校経営などの教育実践を行ってきた。これらの実践を通して、特別支援学校の教育の方向性が明確となり、「知的障害養護学校の教育の枠組み」⁵⁾および「高等特別支援学校の教育の枠組み」⁶⁾の論文にまとめた。

さらに、2009年9月には、日本特殊教育学会第47回大会が宇都宮大学で開催され、大会準備委員長として準備委員会企画公開講座、「心豊かな共生社会をめざして ― べ

ーテルとこころみ学園の実践からー」⁷⁾を企画し、その運営に努めた。

そして、2014年度からは、作新学院大学人間文化学部の特任教授に就任し、「知的障害の発達心理学」(教職科目)の講義を担当するなど、小学校および特別支援学校の教員養成に取り組んでいる。

本稿においては、特別支援学校の教員養成に長年関わってきた一研究者として、これまでの講義資料や研究論文を整理しつつ、特別支援学校の教育機能とその構造を明らかにしようと試みる。

I 「お母さん」と「創を授かって」

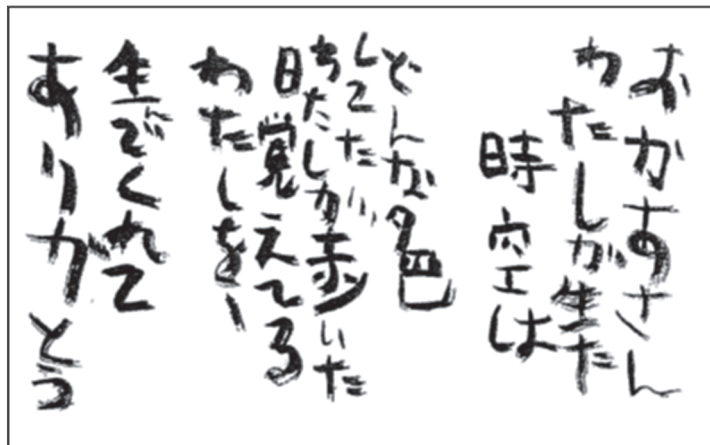
2001年4月から2004年3月までの3年間、宇都宮大学教育学部附属養護学校の校長として、教職員の協力を得ながら学校経営および教育実践に携わってきた。

以下は、本校での体験を通して得られた資料によるものである。

研究室で仕事をしているとき、木内チエさんの「お母さん」の詩が世界ハート展(NHK)に入選したと担任から報告があり、FAXで作品を知ることになった。(資料1)

読んでみると、「相田みつを」を思わせる筆ペンで書かれた、^{*}時^{*}空の漢字がまず目に飛び込んできた。最初は、そのユニークな書体に驚かされた。

資料1 「お母さん」の詩



そして、チエさんの感受性の豊かさに感心させられるとともに、「私を生んでくれてありがとう」という最後の3行には完全に圧倒されてしまった。しばらくは感動で涙が止まらなかった。

そのときの想いをチエさんへ贈る言葉として綴ったのが、資料2の『天使の子どもたちへ』(「学校だより」巻頭言)である。

また、本校においては、「PTAだより」を毎年発行している。最後のページには、保護者が持ち回りで我が子への想いを綴る、【シリーズ・翔べ子ども達】のコーナーが設けられていた。資料3の『創を授かって』(「PTAだより」第46号)は、保護者の大貫光代さんによる寄稿文である。文章を読み終わって、チエさんの詩と同じように、大変感激したことを今でもよく覚えている。

とくに、「15年たった今は、選んでくれてありがとうと思えるようになってきました。」のところは、胸が熱くなり涙が止まりませんでした。

資料2 『天使の子どもたちへ』

高等部3年、木内チエさんの「お母さん」という詩が全国2,865編の応募の中から、「第2回世界ハート展（NHK）」の入選作品に選ばれました。大変喜ばしく、チエさんにおめでとうと言いたと思います。

この詩にはこの世に生を与え、これまで自分を支えてくれたものに対する感謝の気持ちと畏敬の念とが素直に表現されています。人間は一人では生きていけない生き物であり、類としてはじめて存在できるところに大きな特徴があります。

ですから、『生かされた存在』として人間が自分を意識することは自然な成り行きといえます。また、英語のPerson（人間）の語源はPart（部分）からきているといえます。人間が類的存在を前提としたPartに位置しているのは、生かされた存在を語源的に裏づけており、大変興味深いものがあります。

同じ英国において、障害を伴う子どもたちを「天使の子どもたち」と呼び、親も社会も親しみを込めて心広く受け容れているといえます。障害がわかったときから、その子どもに必要な教育や福祉を何のためらいもなく与え、伸びるものを十分に伸ばせる社会があれば、それはすべての人々の教育及び福祉、そして文化の発展にも繋がります。これはきっと脆く弱い社会ではなく、したたかな（下確かな）社会であるはずで。

最近の生命科学において、人間は皆6, 7個の病因遺伝子をもっており、遺伝子は常に突然変異することが明らかにされています。そして、障害を伴う子どもは一定の頻度で必ず生まれると指摘されています。その意味では、社会を構成する人間は好むと好まざるとにかかわらず、類としての負の遺産を背負っているといえるでしょう。その負の部分誰が背負うかは全くの偶然の結果です。障害を伴って生まれた人は私に代わって、それを受け取ってくれた人たちなのです。

精神科医であった神谷美恵子は、その著書「人間をみつめて」において、「なぜ、私ではなくあなたが？あなたは代わってくださったのだ」と述べています。つまり、彼女はハンセン病の患者さんに、「なぜ、私ではなくあなたが？」と問うているのです。

英国で障害を伴う子どもたちが「天使の子どもたち」と呼ばれ、社会に広く深く受容されている様相とこの言葉は私には二重写しになって見えます。彼の地の人々は、まるで、近年科学が明らかにした事実を昔から知っていたかのようです。

ここにこそ、人間や人間社会の真実があり、障害を伴う子どもたちの教育と福祉の必要性の科学的根拠があると信じます。純粋なチエさんは、この真実をこの詩に素直に表現できたのではないのでしょうか。そして、人々の魂を震わす共感を引き起こしたのではないのでしょうか。

チエさんに“おめでとう、素晴らしい詩ありがとう”と言ってあげたいと思います。

資料3 『創を授かって』

我が家の長男創は、昭和60年7月8日誕生しました。名前は、クリエイティブ（創造的）な人間になってほしいとの願いを込め、主人が命名しました。出産は、予定日より10日遅れているということで陣痛促進剤を使ってお産となりました。一時心音が弱くなって酸素吸入もしました。生まれると臍帯が首・手・足に巻きつき、すぐに産声を上げず、看護婦さんが背中を叩いてから産声を出しました。私は出産を終えた安堵感いっぱい、後に起こる障害のことなど予想できませんでした。しかし、生後2日目チアノーゼの発作を何度も起こし小児病棟へ移されました。検査の結果、頭蓋内出血をしていると言われた時は、驚きと同時に涙があふれ出し、絶望的な気持ちを抑えることができませんでした。一週間後出血も吸収されたと聞いて一安心、その後順調に回復し15日目で退院できました。退院後は、母乳もよく飲んで体重も増え、首のすわり、寝返りと順調に発達していましたが、おすわりが上の子と比べて上手にできないのを心配していました。

8ヶ月検診時に発達の遅れが少しみられると栃木県身体障害医療福祉センターを紹介され機能訓練をすることになり、週に1回の訓練に通い1歳6ヶ月で歩けるようになった時は、みんなで喜びました。でもそれで終わりではなく、2才の誕生日を迎えると「てんかん」の発作を起こし、毎日の服用を余儀なくされました。現在発作はありませんが服用は続けています。早期療育という観点から3才より若葉園へ入園する傍ら、週末には東京の「さざんかの会」へ通いました。それらを通して親子関係も少しずつ確立してきましたが、一方で自動扉へのこだわり、すぐに癇癪を起こすなどの問題行動が目立つようになりました。今大変な思いをして後で楽をするか、今楽をして後で大変な思いをするかとの先生方・先輩のお母さん方に励まされ、一つ一つ課題をクリアーしてきました。問題行動は今もありますが……。

本校に入学した頃は言葉はありませんでした。でも文字には興味を示していました。先生からいただいた文字板・絵カードを使いマッチングさせたり、事ある毎に文章を書いて見せたりしているうちに自分の名前を書き、家族の名前を書いたりと広がっていきました。そして今は、新聞を見ながら文字を書き写し、難しい漢字も覚えています。中学部では、朝走ることが日課となり、体力もつき市内マラソン大会に出場し完走できるまでになりました。今年も父子で出場し、達成感を得られればと思っています。またテレビの歌番組を見るのが好きで、題名・歌手の名前は私より覚えています。曲によっては最後のメロディーを口遊むこともあります。今年高等部に入り、学校生活も残り3年となってしまいました。一つでもできることを増やせるよう過ごしていきたいと思っています。

私達家族の心は、創のイノセント（無垢）な心に触れることで、浄化されていることを強く感じています。創の存在自体が尊いものだと思っています。創をどう育てていったらいいのかわからず相談機関を訪ねると必ず、「貴方方だから選ばれたの」と言われました。その時は、どうして私達なのよ、他の家でなく家なのよと思うこともありましたが、15年たった今は、選んでくれてありがとうと思えるようになってきました。これから先まだまだいろいろな困難が待ち受けていると思いますが、根気・元気・暖気（ぬき）の精神で、先輩のお母さんがさりげなく言った「一粒で二度おいしい」という言葉を噛みしめながら、生きた証を積み重ねていきたいと思っています。

それは、チエさんの母親への言葉と同様、光代さんが息子の創さんに対して、「選んでくれてありがとう」と感謝の言葉を綴っていたことに起因する。つまり、障害に苦しみながらもそれを乗り越えようと懸命に生きる両者が、相互に愛と感謝の気持ちを抱いていることが明らかになり、震えるような感動を呼び起こしたと思われる。

以上のように、チエさんの詩「お母さん」と大貫さんの「創を授かって」には、相手に対する深い愛情と感謝の念が共通して認められる。この事実は、障害のあるなしにかかわらず、人間理解をすすめるうえで重要なヒントになると考える。

II 自己実現（生きがい）と人間理解

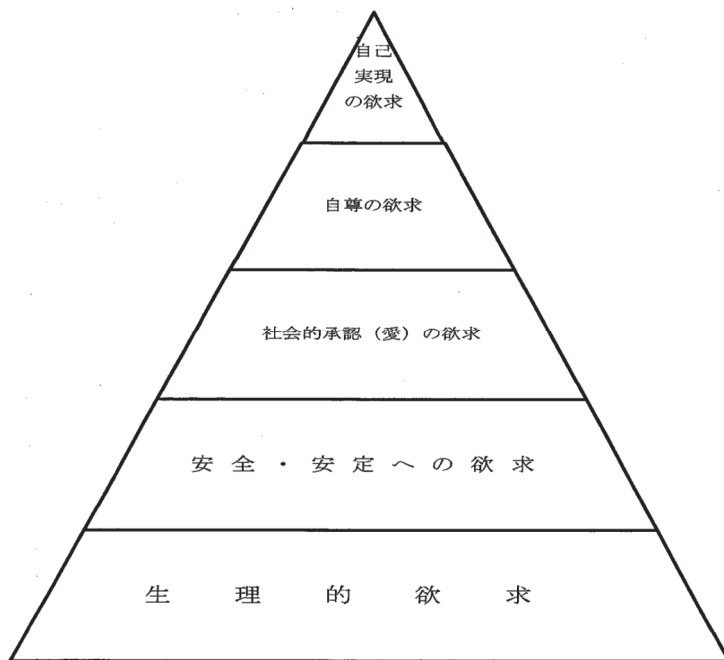


図1 人間の基本欲求

A.H.Maslow は、人間には5種類の基本欲求があり、それらは平面的に同格の関係にあるのではなく、5層のヒエラルキーを成していると指摘している。(図1)

そして、自己実現の欲求とは、自分自身のかけがえのない独自性、個性、秘めたる可能性を存分に発揮し、何事かを成し遂げたいという欲求であるとしている。

この意味では、人間はその可能性や才能を十全に開花させ、成り得る者になるために生きる存在といえる。

ところで、自己実現と本人の生きがいとは、広い意味で同じ概念と考えられる。それぞれが自助努力をし、成り得る者になるために精一杯生きることが、自己実現への過程そのものであり、それが生きがいに繋がるのである。

また、人は自分のためだけでなく、他に役立つ行為で感謝されることによって、持続的で深い喜びを得ることができる。つまり、他に役立つ行動を自主的にとることで、本当の生きがいを感じるのである。(生きがい感)

こうした観点から教育とは何かを考えてみると、それは子どもたちの発達を促すよい環境を用意し、一人一人の子どもが、そのうちなる伸びる芽を発現できるように守り育てていく働き、つまり、自己実現を促す営みであると指摘できる。また、特別支援教育のねら

いも同様であって、子どもたちの伸びる可能性、それがどんなに小さなものであっても、それを引き出し、一人一人に自己実現の喜びを味わわせることにあるといえる。

一方、人間理解については、障害の有無にかかわらず、人間だれしも縦軸に時間、横軸に空間の2次元の軸で、「今どこにいるのか」が物理的に位置づけられる。

就学前、学校教育、職業、老後のどの時空間であっても、「その人が生きがいを得た充

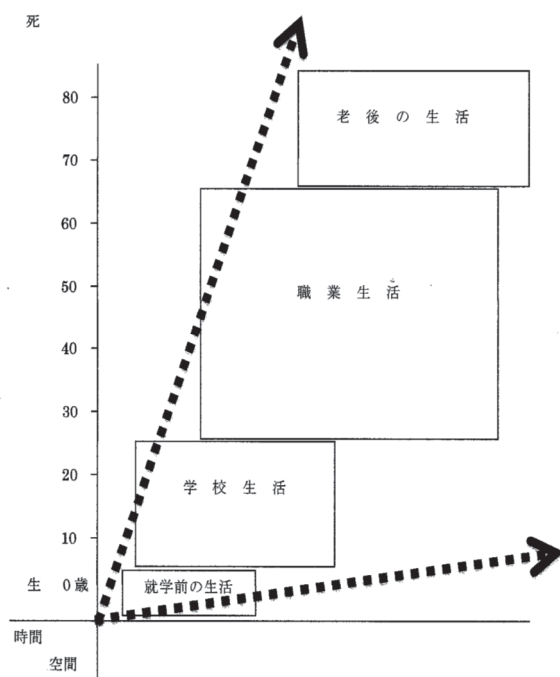


図2 人間理解の3つの軸

実した生活を送っているのか」にポイントを置いて、すなわち、自己実現(本人の生きがい)を第3の評価の軸に据えて、人間理解をすすめることが大切である。(図2)

また、人間には年齢や性、社会的地位といった諸属性がある。障害もその属性の一つに過ぎない。従って、「障害者」ではなく、「障害を伴う人」と表現するのが適切である。英語で表記すれば、Persons with Handicapとなる。

つまり、本人の人格(Person)の部分が第一義的に尊重され、その人が充実した人生を歩めるような共生社会を創造することが最も重要なのである。

Ⅲ 特別支援学校の教育の構造

特別支援学校は、児童生徒の発達段階に応じて小学部、中学部、高等部の3つに分かれている。一般の学校のように別々の学校になっているのではなく、同じ敷地内に置かれているという特徴がある。それ故に、小学部入学から高等部卒業までの12年間を通した、一貫した教育が可能である。(小・中・高の一貫教育)

そして、卒業後の生徒のほとんどは、一般企業であれ作業所であれ何らかの社会的活動に参加し、社会人になっていく。社会人になって就労先に上手く適応し、それぞれが生きがいを得た充実した生活を送っていれば、とくに問題はない。しかし、現実には職場定着できず、不安定な生活を余儀なくされる卒業生は少なくないのである。働きたくとも働く場がないあるいは職を転々とするなど、不安定な生活を送っている卒業生の保護者が年を重ね、「この子を残して死ぬに死ねない」といった思いを募らせることはよく理解でき、心が痛む。

そこで、卒業生が社会に出て立派に自立し、生きがいを得た充実した人生を送れるよう

にすることを、特別支援学校の教育の基本に据えるのである。小学部の教育では人間が人間らしく生きるための基礎となる、衣服の着脱、食事、排泄、歯磨き・洗顔などの基本的な生活習慣を学ぶことに重点を置く。(自立のための学習Ⅰ-2)小学部低学年では、そのレディネス形成としての感覚・運動機能向上の学習が中心となる。(Ⅰ-1)

また、中学部の教育では将来の社会的自立を目指し、コミュニケーションを含む社会生活能力を身に付ける学習と作業学習が重点となる。(自立のための学習Ⅱ)

高等部の教育は、卒業後を見据えた進路指導と産業現場等における実習に力点を置くのである。(自立のための学習Ⅲ)そして何よりも、特別支援学校においては、自立のための

学習Ⅰ・Ⅱ・Ⅲが移行過程も含めて、系統的・体系的に行われることが肝要である。とくに、障害のある子どもたちは、教育・福祉・労働・医療の各分野において、生涯にわたり何らかの継続的な支援が必要なのであり、その教育は移行支援の視点からすすめなければならない。

この移行支援を着実にを行うためには、就学前から卒業後まで情報を引き継ぐ、学校版の「個別カルテ」は不可欠である。

医者が患者の病状や処方箋をカルテに書くように、教師もまた児童生徒の実態把握(評価)と指導計画(支援内容・方法)を個別のカルテに書き込むのである。

それを活用すれば、たとえ子どもたちの学ぶ場や生活の場が変わったとしても、生涯にわたって一人一人に応じた適切な支援が受けられるようになる。

また、「自立」の捉え方については、一人で立つ自立と自らを律する意味での自律は、

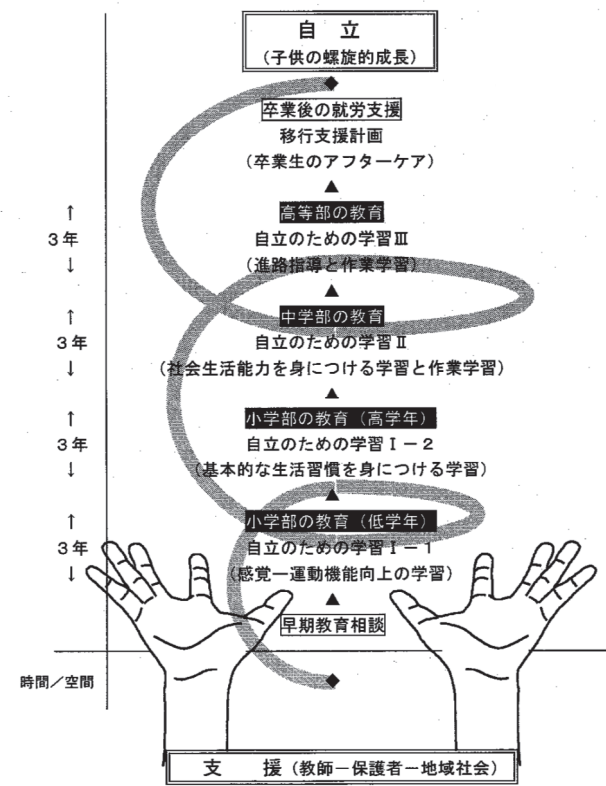


図3 特別支援学校の教育の構造

概念として車の両輪と考えられる。子どもたちが単独でできることは、一人で立つ意味で文字通り自立だし、だれかの支援を受けてできるようになることもまた立派な自立である。そして、できるようになるためには、何よりも気持ちを自己コントロールする必要があるので、自立と自律とは車の両輪といえるのである。

以上のことから、学校とは何かを考えてみると、特別支援学校に限らず、自立に向けて主体的に学ぶ児童生徒を主人公として、教師を中心に、保護者や地域社会がお釈迦様の手になって、【みんなで協力して子どもたちを支援する場】と認識することが重要である。

このような考え方からすれば、「特別支援学校の教育の構造」は、教師、保護者、そして地域社会の連携の中で、学校の主人公である児童生徒がそれぞれの発達課題を一步一步乗り越え、自立へ向けて螺旋的に成長・発達・成熟していくイメージで描ける。(図3)

IV 特別支援学校における支援領域と教育課程の編成

ここでは、宇都宮大学教育学部附属養護学校の研究紀要⁸⁾から引用して、特別支援学校の支援領域と教育課程編成の在り方について述べる。

「特別支援学校の教育の構造」を踏まえて教育課程を編成する場合、卒業後の社会参加と自立に向け、子どもたちがなだらかに移行するという理解は重要である。

ところで、高等部生徒の卒業後を考えると、福祉サイドの人のライフプランを、「生活」「就労」「余暇」の3領域に分ける方法は参考になる。つまり、障害に応じるのではなく、個人の生活に応じるという発想である。この福祉の発想を学校教育の段階から、教育課程の中に取り込むことは、卒業後の生活への適応を円滑にするだけでなく、一人一人の学習指導の効果を高めることに繋がる。

そこで、本研究では個別の教育的ニーズや卒業後の生活像を考慮しながら、教育内容を「発達・学習」「生活」「就労」の3支援領域に分類・整理するとともに、指導の形態および学習内容の抜本的な見直しを図った。(図4、5) 図4と5を重ねてみると、各部の重点となる指導の形態と学習内容との関係がよくわかる。

図4の小学部の「おはよう」は、「覚醒水準を調整し、登校時の情緒の安定やその後の学習を促す、一日の学校生活の基盤づくり」をねらい、また中学部の「生活学習」は、「地域生活や家庭生活、余暇に必要な基礎的・基本的能力や態度を系統的・発展的に育む」、高等部の「社会生活と進路」は、「生徒自らに自分の進路や将来の生活、生き方などを考えさせるために、教育内容の体系化・系統化を図る」、そして学部共通の「チャレンジ」は、「国語、算数・数学、自立活動等の個別の発達課題や基礎的・基本的な内容の習得」を目指しており、これら何れもが新しく導入された指導の形態である。

また、本研究の教育課程編成の手続きとしては、①学校教育目標等の確認および個別の教育的ニーズの把握、②支援領域による教育課程の編成、③個別の指導計画や年間指導計画の作成、④「Plan-Do-See」の授業実践の手順ですすめた。

そして、再編成された教育課程と授業の実践を通して、(1)一貫した視点のもとで教育内容の見直しが図りやすい、(2)小学部から中学部、中学部から高等部への移行がしやすい、(3)個別の教育的ニーズに応じた系統的な学習内容を設定しやすい、(4)各部における中軸となる学習を組みやすいことなどが明らかになった。

最後に、評価に関しては「形成的評価」を基本とし、教師、保護者、関係機関、そして何よりも学校の主人公である子どもたち自身が教育目標や教育課程、支援内容・方法等を評価するものと捉え、これら4者がそれぞれの観点(切り口)で切った断面が評価内容に

なると考えた。なお、子どもたちの評価については、「子どもの気持ち」として教師がそれを汲み上げ評価内容とした。

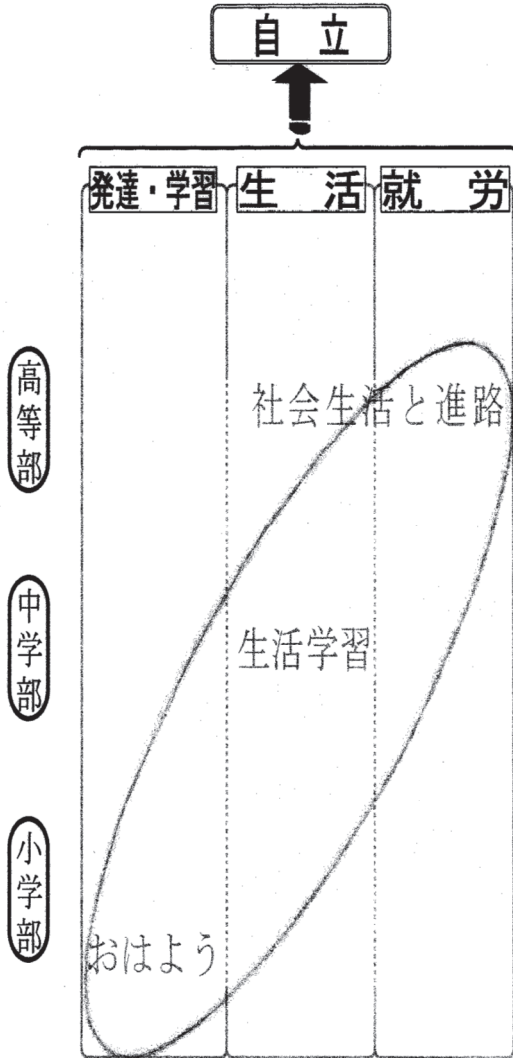


図4 重点となる指導の形態

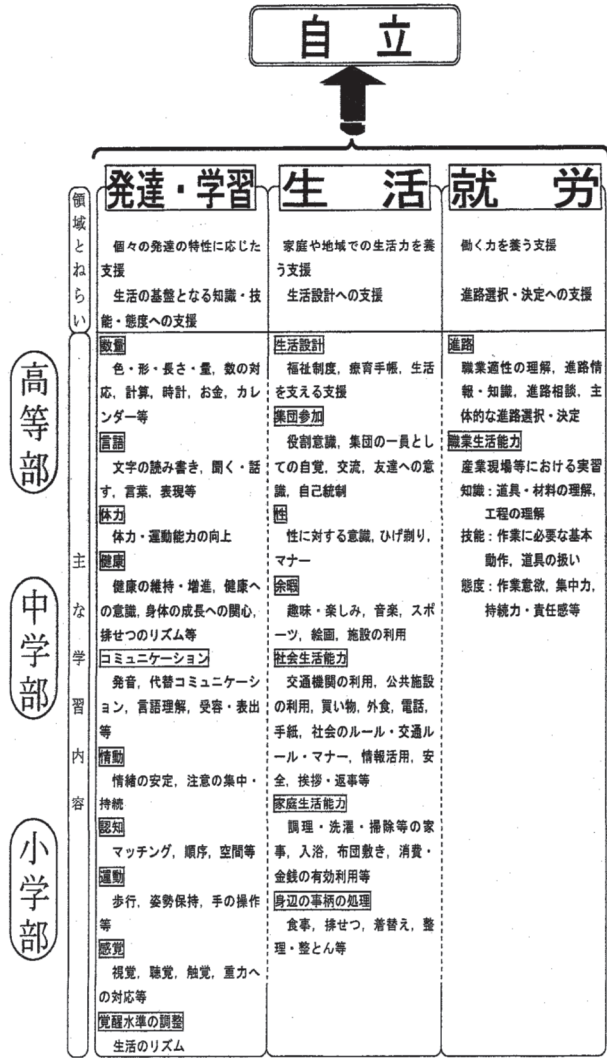


図5 支援領域と各部の学習内容

おわりに

大学における講義資料および研究論文に基づき、「特別支援学校の教育機能とその構造」について検討してきた。そして、人間理解については、自己実現（本人の生きがい）を第3の軸に据えて理解することの重要性を指摘した。

こうした観点から特別支援教育とは何かを考えてみると、それは子どもたちの発達を促すよい環境を用意し、一人一人の子どもが、そのうちなる伸びる芽を発現できるように守り育てていく働きであり、たとえ子どもたちの伸びる可能性がどんなに小さなものであっても、それを引き出し、一人一人に自己実現の喜びを味わわせることにあるといえる。

そして、今回の研究を通して、特別支援学校に限らず、学校とは自立に向けて主体的に学ぶ児童生徒を主人公として、教師を中心に、保護者や地域社会がお釈迦様の手になって、【みんなで協力して子どもたちを支援する場】と共通認識することが極めて重要であり、とりわけ、特別支援教育をすすめるにあたっては、子どもたちの自立（自律）と社会参加を目指して、就学前から卒業後までの継続的な移行支援が必須であることを明らかにした。

最後に、特別支援教育においては、一人一人に応じた適切な自立支援が必要不可欠であることから、「特別支援教育」の用語を「自立支援教育」に改めることを提案して本稿を終える。

引用・参考文献

- 1) Hiroshi Sakuma (1976) ,Vocational Problems of the Mentally Retarded — A Case Study — ,BULLETIN of the Tokyo Metropolitan Rehabilitation Center for the Physically and Mentally Handicapped
- 2) 佐久間宏 (1991)、「こころみ学園における教育的機能とその構造 (1) — 学園の施設環境条件—」、宇都宮大学教育学部紀要、第 41 号
- 3) 国立特殊教育総合研究所 代表 大石三四郎 (1984)、「障害児のパターン認識に関する総合的研究 (特別研究報告)」
- 4) 佐久間宏 (1983)、「精神薄弱児の視覚パターン認識の諸特性 (1)」、宇都宮大学教育学部紀要、第 34 号
- 5) 佐久間宏 (2002)、「知的障害養護学校の教育の枠組み」、宇都宮大学教育学部教育実践総合センター紀要、第 25 号
- 6) 佐久間宏・高橋みゆき (2004)、「高等特別支援学校の教育の枠組み」、宇都宮大学教育学部教育実践総合センター紀要、第 27 号
- 7) 佐久間宏ほか (2009)、「心豊かな共生社会を目指して — ベーテルとこころみ学園の実践から —」、日本特殊教育学会第 47 回大会発表論文集
- 8) 佐久間宏ほか (2003)、「個別の教育的ニーズにこたえる教育課程と授業の実践」、宇都宮大学教育学部附属養護学校研究紀要、第 18 号
- 9) 佐久間宏 (2015)、「高等特別支援学校に関する研究 — 教育の在り方を中心として —」、作新学院大学・作新学院大学女子短期大学部 作大論集、第 5 号
- 10) 佐久間宏 (2016)、「こころみ学園に関する研究 — 人間教育を中心として —」、作新学院大学・作新学院大学女子短期大学部 作大論集、第 6 号
- 11) 佐久間宏 (2017)、「知的障害児の視覚パターン認識に関する研究」、作新学院大学・作新学院大学女子短期大学部 作大論集、第 7 号
- 12) 佐久間宏 (2018)、「知的障害児の視覚パターン認識に関する研究—模写テストを中心として—」、作新学院大学・作新学院大学女子短期大学部 作大論集、第 8 号